

【使徒書日課】使徒言行録 16章16～34節

¹⁶わたしたちは、祈りの場所に行く途中、**占いの霊**に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。¹⁷彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」¹⁸彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。¹⁹ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。²⁰そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。²¹ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」²²群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。²³そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。²⁴この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

²⁵真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。²⁶突然、大地震が起り、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。²⁷目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げってしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。²⁸パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」²⁹看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、³⁰二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」³¹二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」³²そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。³³まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。³⁴この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。

【福音書日課】マルコによる福音書 5章1～20節

¹一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。²イエスが舟から上がられるとすぐに、**汚れた霊に取りつかれた人**が墓場からやって来た。³この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかつた。⁴これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかつたのである。⁵彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。⁶イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、⁷大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」⁸イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。⁹そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。¹⁰そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。

¹¹ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。¹²汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。¹³イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。¹⁴豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起ったのかと見に来た。¹⁵彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。¹⁶成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起ったことと豚のことを人々に語った。¹⁷そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。¹⁸イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。¹⁹イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」²⁰その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

主イエスに招かれた者たちの集まり

主イエスが弟子たちを連れて町や村を巡り、《神の国》のことを教えてくださっていたとき、どこに行っても多くの人が喜んでその教えを聞きに集まってきていました。主イエスのお語りくださる言葉が、人の心に響いたのでしょう。一度その教えを聞いた人は、次には自分の家族や知人を主イエスのいらっしゃるところに連れて来ないではいられなかったのです。中には、子どもたちを連れて来た人たちもいました。「この子たちには、もしかしたら、まだ主イエスの教えを十分に理解することはできないかもしれないけれども、それでも、ぜひ主イエスに触れて、主イエスのことを心と体で知るようになってもらいたい」と願ったのでしょう。ところが、弟子たちの中には、そうして連れて来られた子どもたちを主イエスの近くに行かせてはいけな、と言った人たちがいました。きっと、まだ知識もなく理解力もない子どもたちが主イエスの近くに行っても無駄だし、大人たちが主イエスの教えを聞くのに邪魔な存在になる、と考えたのでしょう。けれども、主イエスは、そのような考えの弟子たちを見て、おっしゃいました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」(マルコ 10:14)。

主イエスは、どんな人とも共にいようと近づき、ご自分のもとに迎えてくださる方でした。飢えている人、沈黙する人、悲しみの人、友のない人、無気力な人。そういう人たちのこともご自分のもとにお招きくださった主イエスは、中でも子どもたちのことをいつもお招きくださっていたのです。ご自分の弟子たちの集まりの中心に子どもを立たせて、「この子供のようにならなければ…」とお教えになられた主イエスに従って、わたしたちは、いつも子どもたちが教会の中心にいることを心に留めようとしています。「こどもの日・花の日」の今日だけでなく、いつでも、わたしたちの礼拝の真ん中に子どもたちがいてくれることを望んでいるのです。そうすることが、主イエスの願われたことであるし、そうすることで、主イエスの教えを行うことにもなるからです。

《主イエス》に触れて

わたしたちの教会では、普段は、子どもたちのことを第一に考えた礼拝として、9時からのCS礼拝をおこなっています。讃美歌も祈りも説教も、何より子どもたち優先で準備した礼拝です。けれども、それは、子ども向けの礼拝ごっこをしている、ということではありません。むしろ、子どもたちを中心に行っていることによって、聖書の教えはストレートに語られているし、神の国の福音がはっきりと告げられている、と言っても良いのです。

大人が圧倒的に多数となる10時半からの礼拝のほうが、その点は難しいのです。大人を相手にすると、聖書の教えをまっすぐに語っても、必ずしも素直に受けとめてもらえないことがあります。神の国の福音をはっきりと告げても、「自分はそういうことを聞きたいのではない」と拒まれてしまうことがあります。わたしたちは、大人になり人としての経験を重なるほど何でもよく分かるようになるというわけではなくて、むしろ、自分の経験や知識に邪魔されて、本当に大切なことが分からなくなることもあるのです。神のこと、信仰のことは、なおさらのようです。大人になるにつれて、いつの間にか、神のことよりも人のことを、信仰のことよりも知識のことを、優先するようになってしまうところがある。

もちろん、子どもたちが大人に比べて純粹で無垢だ、というわけではないでしょう。子どもたちにも、心に問題があります。罪の問題を抱えています。いろいろな思いがぶつかり合うこともあれば、悪い思いを持つこともあるでしょう。けれども、神に思いを寄せること、主イエスに近づくことに関しては、大人のわたしたちよりもずっと素直だし、大胆です。むしろ、そのような子どもたちの信仰を妨げようとしているのは、何だかんだと自分の知識や経験で判断を下そうとする大人のわたしたちだったりするかもしれないのです。

福音書に、主イエスがゲラサ人の地方に行かれたときのことが物語られています。そこに、墓場を住まいとし、何かに取りつかれている人がいました。この人に取りついていてしたのは、「汚れた霊」とか「悪霊」と言われていますが、「レギオン」とも呼ばれています。「レギオン」というのは、ローマ人の軍隊のことです。この人は、自分はローマ人の軍隊の一員だと思い込んでいたのでしょうか。皇帝の支配するローマ帝国の中で軍人という良い地位を得ることを願っていたのかもしれませんが。そのような人の「レギオン」に取りつかれた心を、主イエスは、解放してくださったのです、「汚れた霊、この人から出て行け」と告げられて。「レギオン」に縛られていたこの人は、主イエスと出会うことによって、「レギオン」から離れることができました。そして、そのかわりに、主イエスと一緒にいくことを願うようになりました。主イエスの近くにいること、主イエスを通して神に思いを寄せることへと、導かれたのです。世の中でがんじがらめの思いに縛られて生きてきた「大人」から、素直に神に思いを寄せ、主イエスに近づくことのできる「子ども」のような者に変えていただいたのです。

大人の皆さん。わたしたちも、この合同礼拝の中心に招かれた「子どもたち」のような者に変えていただきたいのではないのでしょうか。

あなたも家族も《神の家族》となる

子どもの皆さん。わたしは、大人を代表して皆さんに言いたいと思います。神の招きに応じて教会に来てくれて、ありがとう。主イエスのお呼びかけに応じて、わたしたちの礼拝の真ん中に進み出てくれて、ありがとう。そう言いたいと思います。皆さんの存在のおかげで、わたしたちは、主イエスがお教えくださった大切なことを思い起こすようにされています。主イエスがわたしたちのためにしてくださいました救いの出来事が何だったのかを思い起こすようにされているのです。

ところで、皆さんの中には、家族の中で一人だけで教会に来て礼拝に加わってくれている人がいると思います。わたし自身は、両親が信者、祖母や曾祖母も信者という家庭で生まれ育ちましたから、家族の皆が教会に行き、礼拝に出るのは、当たり前という環境で過ごしてきました。今は、むしろ、礼拝に必ずしも出て来ない「牧師館住まいの息子たち」のことが気がかりなぐらいです。それは、でも、ぜいたくな悩みでしょう。皆さんの中には、だれも教会に行こうとしない家族の中で、今日も、自分一人だけ教会に来て礼拝に加わってくださっている方が、少なくないのですから。

けれども、そういう皆さんにも、知ってもらいたいと思います。そういう皆さんが集められてきた教会は、主イエスを中心とした《神の家族》なのです。主イエスには、肉親の家族がありました。けれども、あるとき、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と問われ、ご自分のもとに集まって来ていた人たちを指して、「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と言われたのです（マルコ 3:33-35）。だから、教会では、お互いのことを兄弟・姉妹と呼ぶことがあります。主イエスが長男で、神を御父とお呼びする、《神の家族》なのです。

でも、それは、自分を産んでくれた母や父、血を分けた兄弟や家族はいらない、ということではありません。主イエスは、あの「レギオン」から離れさせた人に、「**自分の家に帰りなさい**」と言われ、家族に自分の身に起こった神の御業を知らせるようにと命じられたのです。その人を通して、その人の家族も神に思いを寄せる者、《神の家族》の一部になることを願ってくださったのです。

使徒言行録の物語。使徒パウロは、あるギリシアの町で、古くからギリシア人の心を支配していた「**占いの霊**」から人々の心を離れさせ、神の御業に思いを寄せる主イエスの道へと人々を導いていました。それは、大地震のように人々の足元を揺るがすことでした。牢に入れられていたパウロらを監視していた看守は、その不思議な経験の中で、主イエスを信じる者になりました。ただし、それは、その人一人が信じて救われることではなかったのです。パウロは言いました、「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます**」。

《神の家族》に招かれてきた皆さん。子どもようになって主イエスに近づきましょう。信じましょう。わたしたちには、希望があるのです。いつか必ず、家族も皆ともに救われ、神の御業に思いを寄せて主の道を生きる者とされる日が訪れる、という希望です。それは、主イエスがお示しくくださった希望なのです。